

六 花

り

っ

か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai
designed by masami

1月号

一



山田六甲

柗の花に近づき来たる鼻
筆買うて師走の街を帰りけり
剃られぬる頭の夢や十二月
土舐めて再び冬田打ち始む
人間に寒し寒しと言へる口
もうと言ひまだと言ひつつ年つまる
蟬引いて障子いく度もあけたてす

冬虹やあてどなければど波止場まで
夕暮の池明るくて寒かりき
丹の鳥居丹といふ形や初詣
手招きをするかに澄みて冬の水
手の下を手のすり抜けし恋歌留多
門柱に門灯にさす初日かな
星の座ふれあふこともなく凍る
双弟子や大つごもりが誕生日
煤逃げの姫路へ脚をのばしけり
二日目の帰り際には晴れてをり
初湯かな数ふるうちに増えて星
初凧や対岸のある瀬戸内海
寒風の方が締め切りよりはまし

おうき
鴨沂抄

中村 房枝

初夢の床のぬくたき目覚かな
初夢に女ばかりを見し怖さ
はにかんで猫撫でてゐる春着かな
道楽の果て見えはじむ味噌雑煮
はじまりに闇のありけり神楽笛
川の名を聞いて忘れて明詣
初鴉大きく翼つかひけり
聞かぬのに初夢のこと語りだす
鯛の鯛残る三日の皿の上

風向きを芋に読めざる嵐かな

ことり

障子貼る母と娘の膝歩き

秋風の通りぬけゆく蛭籠

案山子の手吹き飛んでゆく野分かな

稲雀拍手のごとく飛び立てり

芋嵐は黍嵐の傍題で、黍を倒さんばかりの秋の風。芋嵐も同趣。

掲句を擬人化の句として解釈したら芋自身には風向きが読めないとなり、平凡で陳腐。芋の葉の動きでは風向きが読めない、と解釈すべき。芋の葉が風向きに関係なく激しく揺れるのは芋の葉の形状のなせるわざ、その強い風は一定の方角から吹くのではなく、急に風向きを変えたりするその激しさを主観で写生した句。

特別同人作品

六^{りっ}
卿^{けい}
集^{しゅう}

年
頭
の
辞

貝
森

光
大

颯 風の 大親分が 乗り込めり
鶏 頭の 鳴くかと みて 暮れに けり
大 波の 如く に 揺れ 稲車
髭 剃つて 地 の 滲み だす 威し
枯 木 立 運 転 免 許 更 新 中

(五十頁送り)

ま
た
た
び

梶
浦
玲
良
子

大 仏の眉がびくりと草ひばり
 稲 妻や山へと帰る床柱
 大 根蒔く前歯を風の出入りする
 ひ ぐらしへ正座をしたる松風呂
 ま た た び に 山 彦 ひと つ づ つ 還 る

荒
御
輿

木
内
美
保
子

神 様が転げ落ちさう荒御輿
 悔 残す心に痛き秋あざみ
 芥 子漬一歯に沁みる秋の風
 木 の実散る思ひ思ひの音たて
 葛 引 け ば 崖 の 向 う で 花 揺 る

檜木集

緑蔭
宮森 毅

緑蔭や竹刀の音のもれきたる
美術展木暮の先の道しるべ
雲白き上野の森の青葉闇
江の島を覆ふがごとく雲の峯
コスモスの道に迷彩服の列

初社
水谷ひさ江

柏手の打ち返されし初社
初参り御神酒と戴く五円玉
年賀状戌の一字の福福と
裁初や抱っこをねだる子を膝に
傘差すも差さぬも奈良の初時雨

爽やかや
物江 昌子

豊水を薄く剥きたる朝餉かな
クレープの期間限定夏の果
公園の自転車一掃秋の空
爽やかや磐梯山に雲の立ち
秋めいて肌に馴染まぬファンデーション

六花集



六甲選

河島 和子

秋冷や爪をピンクに誕生日

置きどころなくて祝のカサブランカ

土瓶蒸し三十階の和室かな

湯上りのパックを剥がす夜寒かな

サックスの音色ブラウン山眠る

五ヶ瀬川 流一

名月や惜しみつ灘の生一本

草の実の一つが大事朝の水

名を知らぬ草の実ひとつ紅に

鶏頭の朝の光や妻の鉢

空の色水に映して秋茜

松本 蓉子

寿司飯を鯖につめおる秋祭

小鳥来る人の恋しき昼下がりに

宵寒や君のぬくもり探せども

瀬の音と虫の声聴く夜更けかな

輝きは私の涙星月夜

わかやぎすずめ

記念樹の山茶花白を極めたり

ことはりの手紙も添へて冬菜かな

大根をことこと煮込む母の味

ひやかして買はされてゐる冬帽子

遠目にも夫とわかりし冬帽子

菜根譚

六甲

裁初や抱つこをねだる子を膝に

コスモスの道に迷彩服の列

公園の自転車一掃秋の空

喜久子の忌金木犀の匂ひけり

道半ば腰をおろして薄紅葉

秋雨や山の畑の土肥えて

稲刈機黄金の波を泳ぎけり

夜長かな古い映画の美男美女

真ん中の子の疎まるる萩の風

すすき風山の湯宿の足湯かな

胸元にひよいと蠟螂付けられる

信崎 和葉

誰かが悪戯でカマキリを主人公の胸元に付けた。付
けられた主人公のその後の行動を一切述べていない。
だから、カマキリを胸元に付けられた主人公の驚き
や、カマキリの方が驚いて斧を振りかざして怒る姿な
どを想起させるのだ。また悪戯の主は主人公にとて

近しい人であり、本気で悪戯を怒った気配もないし、
主人公はこのことによつてこの句を授かったのである
から、感謝しているのであろう。

子のをらぬ家の提灯秋祭り
秋日傘人の流れに逆らひぬ

武田 美雪
立花かほる

鶏の追はれて茅の輪くぐりけり

田中 武彦

「永き日のはとり柵を越えにけり 不器男」とは
違つて、この鶏は人が動物に追われて、人間がくくる
べき神事の茅の輪をくぐつて逃げたのだ。「茅の輪」(ち
のわ)とは「夏越」(なごし)の祓(はらえ)の行事
のひとつで茅の輪を潜ることによつて身の汚れを拭う
「みなつきのなごしのはらへするひとは千年の命のぶ
といふなり」と『拾遺集』五巻夏にあるから鶏も西年
の禊ぎを済ませたのであろう。よつて今年の成年は犬
が茅の輪を潜ることになるのであろうか、その上に犬
を追いかけたのがにわたりだったら、などと楽しくこ
の句を鑑賞するのである。

草の絮高く飛びゆく子らの声
新蕎麦を打つ名人の眼つきかな
初写真私みんなに見下ろさる
八丈への渡し場跡や昼の月

延川 五十昭
馬場美智子
林 裕美子
松本文一郎

(以下略)